

# きょうされんBookNavi

## 立岡 暁 共同作業所のころと実践

著：立岡暁

定価 1,575 円

序章 マイナスからの出発

1. 「あした」が見えた、和子さん
2. 生まれかわったしげやん
3. よしえさんの大粒の涙
4. 和みや弁当と美奈子さん
5. 幸恵さんの老後
6. ヒトミさんと障害者自立支援法

7. 「仲間が主人公」をつらめく

8. 21世紀初頭、解決しなければならない課題
9. 薬師寺三重塔に学ぶ
10. ノーマラーゼーションを地域に

補章 最重度といわれた信明さんから託されたこと  
対談 「この子らを世の光にできる地域づくりを」  
加藤直樹 (立命館大学名誉教授)・立岡 暁

胸にこみあげてきました。立岡さんが「ひかり園作業所」の強制競売事件に遭遇された1981年、国際障害者年でもあるその年に私たちの作業所「福岡サンテラス」は開所しました。在宅の

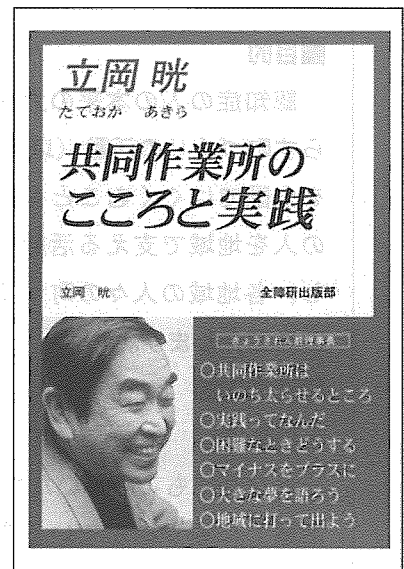
いつお逢いしても「久しぶりやね」「元気してる？」とやわらかい関西弁で話しかけて下さる立岡さん。このたび出版された「共同作業所のころと実践」を吸い込まれるように、一気に読ませていただきました。立岡さんが積み重ねてこられたきめ細やかな実践、いかにも立岡さんらしい障害のある人とその家族への思いが、丁寧に綴られています。私は障害のある長男と歩んできた45年間、共同作業所の仲間と歩んだ26年間の思いが重なって、さまざまなおことが胸にこみあげてきました。

どんな重い障害があっても親や

「あしたも来るわ」の和子さん、元気のいいしげやんが仲間たちの声かけて心の葛藤をしながら「暴力はあかん」と落ちついてくること、軽い障害だけれど一般就労につくため、彼女なりに行動を起こしてしまふ美奈子さん、どの仲間も作業所の中で生きる力、地域でありのままに暮らす力が育っていくように思いました。とりわけ私が重く受け止めたのは「幸恵さんの老後」です。重い障害を持つている仲間の親が年老いた時、親と一緒に暮らせなくなった時、仲間が自分の行き先を決めるのは兄弟でもなく親戚でもなく、宿泊実習を共にした仲間だったり、ホームで一緒に過ごした仲間の所だったのですね。

職員が勝手に決めるのではなく、何かの手段で「イエス」「ノー」を表せることが「自立」と立岡さんは言われています。また、親亡き後の我が子のことを考えるのは遅すぎる、仲間が70歳になった時に安心して暮らせる居場所を考えなければならぬ。ホームは昼間作業所に通うことが前提のもの

法は人を救うものであり、決して法が人を苦しめるようなことがあってはなりません。障害者自立支援法は障害程度区分で人間をぶつ切りにし、細切れにし、人間をまるごと見ていないのではないかを命を太らす作業所へ通っているのに、支援法のために命を絶った家族もあります。きょうされんの理念である仲間を真ん中に据えた実践・事業・運動を今後も続けて、重い障害を持つていても70歳、80歳の老後が豊かに安心して暮らせる社会になりますよう、私たちは、立岡さんのころの実践を胸に今後も努力していきます。



……評者……  
福岡サンテラス (福岡県)  
施設長 小峯寿々子



ご注文は、きょうされん事務局まで